

# 新 歌人群像

## 五島美代子

佐伯裕子



### 胎動を初めてうたった歌人

五島美代子の第一歌集『暖流』以降、『丘の上』『風』『炎と雪』の各歌集から、子を思う歌ばかりを自選して出版したのが『母の歌集』（昭和二十八年刊）『新輯 母の歌集』（三十二年刊、九十四首増補）である。以後、「母性愛の歌人」として広く知られるようになった美代子は、母性の源である「胎動」を初めてうたった歌人でもあった。

胎動のおほにしづけきあしたかな吾子の思ひもやすけかるらし

『暖流』

我ならぬ生命の音をわが体内にききつ  
つこころさびしむものを

同

昭和十一年、三十代後半に出版された美代子の第一歌集『暖流』の中の胎動歌である。一時期、歌を作ることから遠ざかっており、また夫五島茂の留学先であるイギリスに暮らしていたせいで遅い出発となったが、実際に「胎動」の歌を作ったのは、昭和初年であった。

身ごもっている体内には、日々に小さな生命の動く気配がしているのに、今朝はしんと静まり返っている。何と穏やかな朝なのだろう。きっと、今の私のように、私の子も安ら

2001.6



左から茂、ひとみ（10歳）、美代子（昭和10年5月）

かな思いに静まっているに違いない。一首目は、母となる落ちついた喜びを、胎動の静かな朝に重ねてうたっている。胎内の子を「胎児」「お腹の子」と正確に表すのではなく、ひと思いに「吾子」という。そこに、美代子の子供へのつよい愛情が示されている。

二首目は、自分の体のなかに、自分ではない生命が息づいている音を聞いて、どこことなく寂しい思いにかられている歌。愛しい思い、不安な思い、生きてあることの寂しさを、

「我ならぬ生命の音」に聞いているのである。

それは、妊娠した女性の誰もが経験する感情なのであろう。だが、川田順が『暖流』の序文に、「此処には、初めて胎動が歌はれてゐる」と記したように、それまでの女性の歌に「胎動」が登場したことはなかった。美代子は、短歌としての気負いがあつて胎動の歌を作ったのではないだろう。ごく自然な思いとしてうたわれたに違いない。だが逆に、自然であればあるだけ、その自然さのうちに、胎児や子供が、自分の一部であるかのような甘やかな思い込みも育つていった。同世代、あるいは後の女性歌人たちが、美代子の歌に自己愛の匂いを感じるはその点にあった。

## 母系の血

五島美代子は、明治三十一年七月十二日、東京市本郷区（現在の文京区）曙町に生まれた。父、清太郎は、当時第一高等学校教授としており、後に東京帝国大学理学部教授になった。母の千代楯は、明治女学院教授で、後に晚香女学校校長を務めた女性である。

教育者夫婦の長女として未熟児で生まれた美代子は、病弱な子供であった。学齢に達してから母や祖母、家庭教師の手で家の中で

教育されており、小学教科課程を人よりも先に教えられている。八歳のときに尋常科四年に編入し、翌々年にキリスト教の洗礼を受けた。祖父母も父母もクリスチャンだったからである。

与謝野晶子が『みだれ髪』を出版したのは明治三十四年である。二十世紀黎明期の新しい文芸の空気は、幼い美代子の周辺に吹き込んでいたであろう。いっぽう、美代子は十代前半で明治天皇御製と昭憲皇太后御歌を学び、小笠原流礼法家元に入門している。新しさと古い伝統を重んじる五島家の母の教育を、一身に受け継いだ美代子だった。

大正四年に佐佐木信綱門下に入門して、歌を学び始めたのは十六歳の時である。このころから、成栄女学校で礼法や国語を教えるようになる。この早熟な少女が脳炎を患い、後に「鬼が来る」というような不思議な精神状態になったのは、大正五年のことだった。

美代子が、祖母や母という濃密な温床のなかで過ごした思春期は、後の美代子の歌に重要な影響を与えるのである。祖母と母は、当時の日本にあつては最高の教育を受けた名門の婦人であった。しかも、美代子は大正十四年に結婚するのだが、「心の花」の重鎮だった石樽千亦の三男、茂を婿養子に迎えるので

# 五島美代子

ある。祖母、母、美代子と育んできた濃い血のつながりは、自然な流れとして、美代子の長女ひとみへ繋がれていかなければならなかった。

もちろん美代子は、新興歌人連盟に加盟するために「心の花」を退会したり、プロレタリア歌人同盟への加盟と脱退など、昭和三年から十三年の「立春」を創刊する時代にかけて、先鋭な行動をとった歌人でもある。だが、美代子の本質はそういう社会性にはなく、四代にわたろうとしていた母系の環の完成にあったように思われる。

昭和二十五年、東京大学文学部に通っていた長女ひとみの急死でその環が切れたのである。美代子自身も東大の研究生となって、行き帰りを共にしたほど、娘の教育に心を配っていた。娘とともに自分も育ちたい、そういうつよい願いがあつた。それは、かつての、母と自分の関係とおなじ自然なものに見えたのだ。戦後の揺れ動く社会のなかで、ひとみは思想的な苦悩の果てに死を選んだのであるが、そこには、母との葛藤も大きな要因としてあつた。そのことを、美代子は時を追って深く気づいていくのである。

## 子恋いの歌

美代子の子を恋うる心はさらに深まり、断ち切れた弦となつて歌に溢れだした。『母の歌集』は、そういう自分の思いをまとめておこうとしたものである。生涯にわたる美代子の子恋いは、晩年の孫恋いの歌にいたるまで、歌という「声」を求めて彷徨っていく。

汝が命成りけむまへの世をかたれ心ふるへて見つむる母に  
『暖流』

生まれたばかりの子に母が語りかけている。「あなたが生まれる前の世はどんなだったの」……。命の不思議さを前に、心を震わせながら新生児を見つめる母、若い母の感動をさりげなく伝える歌である。

芽ぶきたつ木々に近づけばここの空気がはわが子の息のほひがする  
『丘の上』

春の柔らかな木々、その芽吹きを見ようと近づいていくと、周辺の空気はわが子の匂いがしていた。それは甘やかな、みずみずしい春の匂いであろう。母にとっては、どのような香水よりも芳しいものに違いない。

恋人の如く責めあひて母と子はつひにしづかに手つないで寝る  
『風』

東大の学生になった長女と、同じように学



「朝日歌壇」の選、左から宮柊二、近藤芳美、美代子（昭和30年ごろ）

生生活を共に過ごそうとした母だった。たとえば娘にボーイフレンドができたのかもしれない。あるいは考えかたが違ってきたのかもしれない。まるで恋人のように互いを責めあつて、だが夜になると静かに手をつないで眠る母子なのである。「恋人の如く」と思っているのは母である私だけではないか、そういう疑いを少しも感じていない一首である。そこに、ほどのよい母性愛などでは収まらない、五島美代子の歌の凄まじさが覗く。

この向きにて初におかれしみどり児の日もかくのごと子は物言はざりし  
『風』



右は茂、(ハワイで、昭和43年)

「長女急逝」という詞書<sup>ことばが</sup>きが添えられている。新生児のとき、同じような向きに寝ていたわが子を思い出している。その時も、子は何も言わなかったなあ、と思うのである。だが、現前に横たわっている「子」は、未来永劫<sup>えいごう</sup>に口をきくことのない骸<sup>あたま</sup>なのだ。「この向き」「かくのごと」で、その二つの時間を二重写しにして、「おかれし」という即物的な表現が抑えた悲しみを伝える。

目さむればいのちありけり露ふむ朝  
山ざくら額<sup>ぬか</sup>にふれるて「いのちありけり」  
元素となりしのみにはあらざらむ亡き  
子はわれに今もはたらく 同

長女急逝の数年の後、ようやく生きる気力をとりもどしてきた頃である。露をふくんだ桜、誰かが朝の山から摘<sup>つ</sup>んできた桜が額に触れていた。「ああ、まだ生きていたのだなあ、暗い眠りから覚めようとしている美代子の思いが柔らかかに表されている。

「身のまはり仄<sup>ほ</sup>にぬくみて明るむはずに空気にまじる吾子かも」と、空気のなかに生かじめた亡き子をうたつてもいる。二首目、子は全く元素に返ってしまったのではないだろう。今も私に働きかけてくるのだから……。亡き子への宗教的な愛情が芽生えて、「救い」の感じられる一首である。

### 古典的な女流歌人

ある意味では、身も世もない子恋いの歌とも読める美代子の歌集は、「ナルシズム」(自己陶醉)とか「社会性のない母性愛」として批評されることが多かった。そういう批評のなかで、親交のあった芹沢光治良<sup>せりざわみつらむ</sup>の解説(『現代短歌大系3』三一書房)は、もつともよく美代子の歌の本質<sup>ほんしつ</sup>を捉えたものである。

「この『母の歌集』に詠まれたことを散文で表現したならば、読む者は辟易し、嫌悪を感



昭和46年

ずるかも知れない。(略) 私は和歌という伝統のありがたさを初めてしみじみ思った。」和歌の調べがあるからこそ自己陶醉の嘆きが珠玉のものになった、というのである。優れたインテリゲンチヤールの家庭に育ち、先端の知識を学んだ美代子だが、歌を作るときに、そのような知識を詠み込むことはしなかった。古典和歌の優しい調べを助けとして、子や孫への思いのたけのみを、七十九歳の死を全うするまで、典雅にせつせつと訴えた歌人なのである。

(さえき・ゆうこ「未来」)